

説教

主の聖餐を通して

＜エレミヤ書16:5～7＞

中江 洋一 牧師 (広島教会)



10月の第一主日は「世界聖餐日」に定められています。「世界聖餐日」(World Communion Sunday)とは、異なる文化・経済・政治の状況にあっても、世界の教会がキリストのからだと血を分かち合うことを通して、主において一つであることを自覚し、お互いが抱える課題を担い合う決意を新たにする日です。

この聖餐式は、今では様々な神学的意味づけがされ、教会にとって、また、私たちの信仰にとって、とても重要な教会儀礼となっておりますが、元々はこのパンとぶどう酒を分かち合うという行為が何を意味するものだったのでしょうか？

そのことを考える上でヒントを与えるのがエレミヤ書16章5～7節にある御言葉ではないかと思われます。

エレミヤ書16章には、「嘆いたって、悲しんだってもう遅い。」「平和も慈しみも憐れみも取り上げられる。」「誰も生き残らないのだから、誰も葬ったり悲しんだりしてくれる人もいないだろう」という恐ろしい宣告があります。

そして、16章7節です。「死者を悼む人を力づけるためにパンを裂く者もなく、死者の父や母を力づけるために杯を与える者もない。」

この御言葉の背景には、元々ユダヤ人には死者を悼む人を力づけるためにパンを裂いたり、杯を与えたりといった習慣があったようなのです。

イエスさまがあまりにも理不尽な殺され方をしたために、弟子たちはその死の意味すらも当初は全く理解できませんでした。ただ、弟子たちはイエスさまの死を悼み、また互いに励まし合うためにパン裂きと杯の儀式を行い始めました。それがやがて、イエスさまとの最後の晩餐を思い起こし、過越祭に肉を引き裂かれ血を流す小羊のイメージと重なっていったのではないのでしょうか。そして、さらにそれが後になって、イエスさまの死の意味を思い起こすためのキリスト教会の儀式として確立されていったのではないかと思います。

弟子たちはイエスさまの死のショックから立ち直るために、とりあえず、自分たちがそれまでもやってきたことのある、パンと杯の食事を始めたのではないのでしょうか。そ

れは私たちがお葬式のあとで食べる親族の食事会のようなものかもしれません。

その中で、イエスさまの思い出が語られ、イエスさまがどんなに自分たちのことを愛してくださったか、イエスさまがどんなに貧しい人や病を負った人を手厚く世話をし、弱い立場に追い込まれた人を勇気づけ、孤独な人の友となってくれたか。そして、どのようにして個性の強い、あらゆる政治的立場の人も弟子として受け入れて、それらの人々を分け隔てている壁を越えることを教えてくれたか。そのようなことを思い思いに話し始めていったのでしょうか。

このように、最初の頃の聖餐式とは、おそらくイエスさまの思い出話を語る、弔いの食事のようなものではなかったかと考えられます。そういう食事会を1回だけで終わらせるのではなく、何度も何度も繰り返し、思い返し、語り直すうちに、イエスさまの言葉や行いが蘇ってくるのです。当然、イエスさまの死んだ意味についての話をするでしょう。そして、イエスさまの思いが、ここにいる自分たちの間に今も生きている。そうやって「家の教会」での礼拝が始まったのでしょうか。

イエスさまの十字架の死を記念する聖餐とは、まさにイエスさまのことを分かち合うものであり、イエスさまのことをもっと深く知るためのものでした。イエスさまのように生きるための決心の場でもありました。常にイエスさまのことを思い起こし、「イエスさまだったら、今のこの厳しい現実の前でどうするのか」を考えたのです。

イエスさまは、「神さまから見放されている」と裁かれていた人々を積極的に招いて、「神の国」を宣言しました。そんなイエスさまの食事には、ただ観念的に罪深い人というだけでなく、社会から排除されているために生活に困窮している人もいたはず。そのような人にとっては、イエスさまの食事への招きは自分の命をつなぐ道でした。イエスさまの食事を頂いて、肉体的にも霊的にも生かされるわけですね。

教会の聖餐を通じて、霊的にも肉体的にも養われ、また世界の人々と食べ物と生きる力を分かち合うことこそ、神さまが喜ばれることではないかと思うのです。

在日コリアン文化の創造と多文化共生社会を目指して、在日本韓国YMCAは皆様と共に歩みます。



東京◆ホテル：東京で一番安く便利な宿泊研修施設。フロントは日・韓・英語に対応、24時間営業。10名様～200名様のご会議及び宿泊研修(50名)も可能。

◆スペースYホール：200席の多目的ホール。セミナー・コンサートなどに対応。

◆韓国文化教室(チャング・カヤグム・舞踊) ◆韓国語講座

◆YMCA東京日本語学校(3ヶ月～2年、短期研修)

関西◆にほんご教室(新規開講・募集中) ◆韓国民俗芸術科(舞踊・チャンゴ)

税込	平日	休日
シングル	¥6,700	¥6,200
ツイン	¥10,500	¥9,800
トリプル	¥13,500	¥12,600
※朝食¥200(宿泊者価格)		

在日本韓国YMCA <http://www.ymcajapan.org/ayc/jp/> *会員及び教職者割引有。詳しくはお問い合わせください。

東京韓国YMCAアジア青少年センター 〒101-0064 東京都千代田区猿樂町2-5-5 ☎03-3233-0611

関西韓国YMCAアジア青少年センター 〒537-0025 大阪市東成区中道3-14-15 ☎06-6981-0782

2017年夏期修養会開催 「讃美と証し、御言葉をあなたに!」主題に



ほどが集って行われた。

別府教会の高文国長老の讃美の導きの後、地方会長の李恵蘭牧師による開会礼拝説教から始まった1泊2日間の修養会は講師の安賢洙牧師（大韓イエス教長老会京畿老会、水枝光星教会）の3回の力強いメッセージと韓国の元国会議員の鄭大哲博士による証などのプログラムを通して楽しく、また恵まれた時であった。西南地方会は、最近大韓イエス教長老会（統合）京畿老会と交流を始め、互いに宣教的な課題を分け合おうとしている。交流の中心的な役割を担っている安賢洙牧師は、過去「祖国の平和統一のための基督者東京会議」にも数回参席したこともあり、在日大韓基督教会に対し、また日本に対する宣教的な熱望を持っておられ、これからの西南地方会との良き交わりを期待する。

定期全国協議会を開催 新役員を選出し、新たな一歩踏み出す

2017年9月17日（日）～18日（月）にかけて豊橋教会で、青年会全国協議会第55回定期全国協議会が開かれた。鄭守煥牧師が、開会礼拝のメッセージを伝えた後、機関紙『灯台』の発行された時代背景や活動の歴史などを説明した。青年たちにとっては改めて活動の意義を深く確認する機会となった。

新しい中央委員として、呉眞雅（代表）、梁政宇（副代表、渉外部長兼務）、李智熙（書記、財政部長兼務）、張晶洙（総務、広報部長兼務）、文野直美（企画部長、灯台編集事業部長兼務）、文瑠珂（地方会青年会振興部長）、末松律子、文美華、乾春紀が選出された。閉会礼拝の新井由貴牧師のメッセージにも大いに励まされた。新しい一歩を踏み出した青年たちをこれからも応援しよう。

（信徒委員長 金汎野）



奈良教会 金炳錫長老が召天 1986年受洗以来、教会に奉仕を尽くす



去る6月28日、奈良教会の金炳錫名誉長老が天に召された。享年90歳。

故・金炳錫長老は、1928年韓国で生まれ、1986年奈良教会の朴珍烈牧師から受洗されてから奈良教会のために奉仕を尽くし、1990年長老に将立された。

創立70周年礼拝挙行 声楽家呼び、讃美コンサートで喜び分つ

2017年8月27日午後4時、平野教会は主の導きと恵みによって記念すべき創立70周年を迎えた。これを記念するため、盲目の声楽家、時田直也氏による讃美コンサートを開催し、周辺教会の聖徒たちと主を讃美し、70周年の喜びと感激を共に分かち合った。特にこの日は、信徒の模範として平野教会の歴史と共に歩み、教会に仕え、奉仕してこられた鄭長林執事と殷英世執事の名誉執事推戴式を挙行し、これまでの献身と功労を称える感謝牌を贈呈した。

時田直也氏の魂に響く讃美とスピーチ、平野教会の聖徒が心を込めて準備した愛餐、人知れず影で支えた尊い奉仕などが集いに感動と品格を加え、忘れられない記念集会となった。今回の創立70周年記念集会は、平野教会が主の再臨される日まで、地の果てまで福音を伝える使命を忠実に守り、香しい礼拝と謙遜に御言葉を学び、互いに仕え、健やかな教会を育んでいくことを約束する貴重な時間となった。



創立90周年記念行事盛況 90周年を記念して特別伝道集会も開催

2017年で、創立90周年を迎える福岡教会が創立90周年記念行事を9月に無事に終了した。5月28日午後4時に、西南地方会の各教会から、また韓国から150名が集まり、感謝と喜びの「福岡教会創立90周年記念礼拝」を捧げた。また礼拝においては、李玉己勸士、金政秀、金昌煜、廉文喆按手執事の任職式が執り行われた。そして、90周年を記念して、全教会員の霊的成長のため、ソウルから東橋洞教会の陰東星牧師を招請して「創立90周年記念特別伝道集会」を9月9日～10日に行い、全教会員がより強く信仰を固め、恵みの貴重な時間であった。

福岡教会は1923年、福岡市の吉塚で祈祷の集いとして始まり、1927年3月2日、正式に朝鮮耶蘇教会福岡教会として出発するようになった。戦争により困難な時期を経験しながら、1945年祖国の解放を迎え、帰国船に乗るために日本全国から集った数多くの同胞たちが、教会の近くの博多埠頭に集まり、その人たちのために奉仕活動をした。1946年、教会は残ったわずかの信徒と田永福牧師によって新しい出発をするようになった。

1961年に赴任した金徳成牧師の牧会時代に教会は第2番目の教会堂を建築し、李聖柱牧師の牧会時代、1985年に現在の教会堂を建築し、今日に至るようになった。

歴史の激浪の中で、神の導きによって、創立90周年を迎えた福岡教会は、これから100周年に向けて新しいあゆみを始める。感謝と喜びによって、新しい希望に生きる福岡教会のために皆さまにお祈りを求めるばかりである。



世界改革派教会共同体(WARC) ライプチヒ総会に参加して(2)

総会長 金 性 済 牧師

総会において、韓国教会として特筆すべきことは、WCRCがこの2017年から2025年の光復節80周年に向かって、韓半島の癒し・和解・平和統一をめざすエキュメニカル協調プロセスに取り組むことを表明するイベントが、この総会への北朝鮮のキリスト教徒連盟の代表者4名（2名牧師・2名随行員）を招きながら執り行われたことである。北朝鮮代表者からは、高まる緊張の中にあって、敵意を煽らず、外国の干渉を受けず、自主的な平和統一の道を模索することの重要性が強調された。韓半島の分断と統一の問題を抱える韓国諸教団の代表にとって、期せずしてこの度の会議がドイツの東側に位置するライプチヒにおいて開催され、さらに町の中央に位置する聖ニコライ教会において東西ドイツ統一を記念し想起する礼拝に参加できたことは感慨深いものであった。1989年10月、ベルリンの壁を怒涛のごとく乗り越えていく人々の隊列がこの聖ニコライ教会において繰り返された平和統一の祈祷会から出発していったといわれている。そして、旧東ドイツ時代に、この聖ニコライ教会の福祉（シャローム）事業を、当時の西ドイツの教会が忍耐強く支援し続けたということを、私は感動をもって聞いた。

最後に特筆すべきは、この度の総会期間中、7月5日に歴史的な『ヴィッテンベルク共同声明』が調印されたことである。すでに、1999年にルーテル世界連盟（LWF）とカトリック教会との間で『義認の教理に関する共同宣言』が交わされ、2006年には世界メソジスト協議会（WMC）がそれに参加し、署名した。そしてこの度、WCRCがこの共同声明に新たに加わるに至った。この調印式は、ヴィッテンベルクの聖マリア

対馬だより

韓国からの観光客の増加で島全体が活気

朴 榮 喆 牧師(対馬めぐみ伝道所)

最近の対馬は韓国観光客の増加によって、島全体に活気があふれています。釜山と近い北港比田勝には平日にも6本の船舶が運航されており、週末には2千人以上の観光客が訪問しています。狭い対馬の道路には車の行列が後を絶たず、いたるところにホテルやペンションが立ち並び、免税店と大型マートは嬉しい悲鳴を上げています。

2年前までは韓国人が最も多く往来する商店街の真ん中で「独島は日本の領土」と書いた鉢巻と大型日の丸を持って一日中でデモをしていた住民たちがいましたが、今は見ません。対馬は九州島の半分近い大きな島ですが人口は31,500人に過ぎません。90%以上が森林であり、農耕地は狭小、水産養殖や林業のほかに収入源がありません。ゆえに生活は窮迫、若者たちは高校を卒業すれば、大半が仕事を探して本土に飛び立ちます。したがって、対馬市長を含めて大部分の指導者たちは、観光地として特に自慢できるところのない対馬に、韓国観光客が訪れること自体がたいへんありがたいことだと思っており、韓国観光客の誘致に全力を挙げています。

対馬めぐみ伝道所は、対馬の中心地である厳原の中でも最も目立った所に位置しているため、対馬の住民はもちろん、韓国観光客にも良い影響力を及ぼすように常に緊張と最善を尽くしています。

対馬めぐみ伝道所の信徒は12人ですが、いずれも観光関連

業に従事しているため、日曜午前の礼拝参加は簡単ではありません。しかし、せめて日曜午後の礼拝（日本語の礼拝）や夕方の賛美の礼拝、または朝の祈祷会でもいいから参加しようと熱心に信仰生活を送っています。

韓国語を習おうとする住民たちは多く、教師が牧師一人では無理があるため、最近は生徒を増やしていません。日本語で韓国語を教えられる協力者が必要な時期です。

韓国語教室のほか、毎月住民のための文化教室も開いています。これまで各種ミニコンサートをはじめとした信仰の集会、ドリッブコーヒー会合、韓国料理のイベント、子ども文化教室などを開催しました。冬にはキムチ作りイベントを計画しています。毎週金曜日の夕方に集まる歌教室も良い反応を見せています。

住民たちの中にはキリスト教に対して、また教会について、開かれた心に接することがたまにありますが、正式に登録した方はまだありません。地方の田舎のため、教会出席に対して多くの制約を受けるようです。ある時は目に見える成果がなく苦しいときもありますが、神様の時を待ちながら忍耐し待っています。



国内宣教師報告 在日二世国内宣教師の自伝的宣教報告

東京神学大学 朴 憲 郁 牧師

在日大韓基督教会（KCCJ）総会から最初の国内宣教師として派遣された私に、この度15年ぶりに最初にして最後の宣教師報告の機会が与えられ感謝致します。ここで、在日二世・二代目の牧師として過去から現在に至る歩みを是非とも自伝的に申述べながら報告します。

宣教協約のある日本基督教団(教団)の教団立神学校である東京神学大学（TUTS）は私の母校であります。在学中は李仁夏牧師が牧会する川崎教会に出席し奉仕しました。1974年2月に大学院修了後、言語と文化、教会と神学を修得するために、KCCJの指導と斡旋に従って、2年間母国留学しました。貧富の格差社会におけるエネルギーな社会と文化、献身的な教会の姿、独裁政治と民主化運動を初めて目の当たりにし、在日二世として強烈かつ貴重な母国体験となりました。延世大学・語学堂で母国語を学びつつ、最初の一年は監理教の神学大学と教会（東大門教会）で研修し、二年目はイエス教長老会の神学大学の大学院（修士）と教会（貞陵教会）で学びました。その間に韓国神学大学に週一度出かけては新約聖書神学の授業も聴講しました。当然ながら、監理教の神学大学と教会では盛んにウェスレーが引用され、長老会の神学大学と教会では盛んにカルヴァンが引用されます。それぞれメソジスト派あるいは長老派の伝統を継承する意識と主体が明らかです。長監合同でできたKCCJと合同教会立の神学校（TUTS）で、エキュメニカルで教派意識のない背景で育った私にとって、それは驚きであり、教派的教会と神学校の伝統とはこういうものかと気づかされる良い経験でした。

日本に戻った後、1976年から京都教会に講道師として2年半半仕え、その後岡山教会で担任牧師として5年間牧会しました（1978年10月牧師按手）。その後、1983年にドイツのチュービンゲン大学神学部で留学し、5年間新約神学を研究することが許され（神学博士）、1988年に日本に戻り西新井教会で8年間牧会しました。この時期に二つのことに係わりました。一つは年輩の尹宗銀牧師が定期総会ごとに提唱してようやく実現した総会神学校(会場:東京教会)で10年ほど教え、教務主任及び理事の1人として運営に携わりました。もう一つは、日本基督教団との宣教協約に基づく実質的な教会間交流の先駆けであった西新井教会で働きました。そこでは、①近隣の諸教会関係者の助けもいただきながらオモニハッキョで奉仕して、韓国から来て住む若いオモニたちに毎土曜日に日本語を教えるボランティア活動を助けましたし、②教団東京教区東支区の諸教会との年一回の合同礼拝と講演会をもち、東支区定期総会ごとにお招きをいただいて挨拶しました。また③最初の「韓日讃頌歌」作成における厳正な日本語訳歌詞をつけるために、当時讃美歌委員会の委員であった私が交渉して、東京教区東支区音楽委員会の協力も得て、後日発行に至りました。

母校である東京神学大学から実践神学（基督教教育）部門の神学教師としての招聘を思いがけず受けて、1994年から常勤講師となり、その後は助教授、教授へと昇進して今年で23年半奉職しています。招聘を受けた時は個人契約で専任となりましたが、その8年後の2002年11月には、KCCJと教団との宣教協約に則って、KCCJから教団に神学教師として派遣される国内宣教師の身分となりました。その後二つの動きがありました。一つは、教団における「受け入れ宣教師」として正教師(牧師)の登録がなされ、数年後からは、隔年開催の教団定期総会に推薦議員（→総代）として毎回出席し、今では世界宣教委員会の委員として奉仕しています。もう一つは、歴代の北森嘉蔵牧師と熊沢義宣牧師の後任として、2003年より千歳船橋教会から招聘を受けて、現在までの14年間、担任牧師として兼務牧会をしています。（在日韓国教会の場合とは異なる種々の特徴と課題はありますが、キリストの体なる教会における牧会（魂の配慮）と福音伝道は同じであることを日々認識させられています。

国内宣教師として東京にいますので、KCCJ関東地方会の定期総会や任職員会にはできるだけ陪席して、教職者と信徒の交わりを絶やしませんでした。東京韓国YMCAの理事も務めています。

来年3月末に東京神学大学を定年退職しますが、それに合わせて兼務してきた千歳船橋教会も自ら申し出て辞任しますので、KCCJからの国内宣教師の務めに一応の終止符を打つことになります。

KCCJの牧師としてTUTSの神学教育に携わるケースは初めてでしたが、それだけにKCCJと教団とTUTSの双方にとって私の存在の象徴的な意義は決して小さいものではないでありまう。

TUTSでは私は、新約聖書神学の研究を基礎に据えつつ、「実践神学・キリスト教教育」部門専任教師として「キリスト教概論」と「キリスト教教育特講」、さらに「アジア伝道論演習」と宗教科免許取得のための教職課程科目を、学部と大学院の学生（博士課程生まで合計約110名在籍）に教えてきました。

2学期に亘る「アジア伝道論演習」を終える頃には、履修生中心に実際にアジア諸国（フィリピン、香港、中国、台湾、韓国）に2年に一度、教会研修旅行を実施し、近年20年ほどは私が引率しました。国内伝道を志す日本人神学生たちがアジア諸教会への理解を深め、伝道・神学・教会間の交流を深める貴重な研修旅行となっています。教団の教職者養成機関なので当然、教団所属の信徒が神学校に入学・編入学してきますが、戦時下の教団創立時から諸教派神学校合同（Union）を基礎とする神学単科の学校法人の神学大学ですから、他のプロテスタント諸教派教会からの献身者も少なくなく、最近では女性が増えています。加えてアジア宣教への神学的使命も昔から自覚し、実践してきましたので、今も東北アジア（韓国、中国〔朝鮮族の人も含む〕、台湾など）からの留学生も少なくありません。韓国からの留学生・研修生が最も多く、KCCJの教会からも献身してきます。神学諸分野のハードな基礎的訓練を数年間受けた卒業生たちが、教団とKCCJ、その他の教派教会で見識ある伝道者・牧師として責任ある務めを個教会・諸組織・機関で果たしている姿は頼もしく、私も神学教師としての意義を確認させられます。

しかしその関連で一つ心が痛むことは、TUTSを修了したKCCJ神学生たちを、関東地方会を例に挙げると、伝道師として受け入れ、最後まで牧師として育て上げることに余り成功していないことです。それには、受け入れ教会の規模や財政的困難や体質が起因しています。

学外（国内・国外）のキリスト教諸学会や組織にもメンバーとして活動し、また理事など責任ある務めでも微力ながら果たしています。また、神学関係の著書や掲載論文や講演など、学問的貢献の数は多岐に及びます。一つ寂しく思うのは、キリスト教諸学会のメンバーとして係わるKCCJなど、在日の神学者がほとんどいないことです。是非今後は、教会の実践的・行政的諸活動に留まらず、本格的なアカデミックな神学研究活動によって、教会と教職者を根底から支え提言する人々が現れることを願います。

すでに日韓在日の三教団の宣教会議などで議題になっていると思いますが、献身的な宣教の使命を抱いても、韓国からKCCJや教団を介して直接日本宣教のために来られる宣教師とその家族と受け入れ教会にとって、文化的な負担と困難は決して小さくありません。それゆえに、お勧めしたいことがあります。それは日本の語学・文化・生活習慣・教会・神学における基本的な力、理解、感覚を養い、教会関係者と人的な面識と交流を深めるために、TUTSを含む日本各地の神学教育機関に数年間在籍して研修する機会をもたれることです。これは牧会・伝道上の広がりとも深みをもたらし、実質的な宣教の実を結ぶことになるに違いありません。以上、短く報告申し上げます。

